

# 行って きました!

一般社団法人 在宅療養支援薬局研究会主催

## 薬剤師のための バイタルサイン講習会

現在、6年制の薬学生の実務実習を受け入れている薬局も多いことだろう。「新しい薬剤師像」を見つめる絶好の機会かもしれない。

在宅療養支援薬局研究会(理事長:狭間研至氏, 医師・薬局経営者)は、在宅医療、地域医療の現場で活躍できる薬剤師の育成をめざしている。その取り組みの目玉が、近年注目を集めている“バイタルサイン”の講習会だ。毎月1~2回開催し、定員は1回につき10名。2009年10月から開始し、2010年7月時点で参加者は延べ100名を超えた。

バイタルサインをとる方法だけでなく、患者にもっと積極的に触れよう!と思わせる講義付きで、5時間の講習会終了後には、参加者の意欲はさらに増したようだった。

【取材・文責 PT編集部 木上裕子】



### ◆なぜ講習会を始めたか?—狭間氏の危機感

狭間氏は、医師になった当初から、医師・看護師不足の深刻さ、労働環境の過酷さを体感し、日本の医療体制に危機感を覚えた。そこで、巨大な医療リソースでありながら、地域に根ざした業務が十分にできていなかった薬局・薬剤師の活躍のフィールドを拡げることで、疲弊してゆく日本の医療を救えると確信した。

それでは、なぜ“バイタルサイン”なのか。バイタルサインは患者の基礎情報であり、いわば医療者の共通言語。薬剤師がこれを継続的に把握し共有すれば、他の専門職との連携のきっかけになり、在宅療養における医師や看護師の負担も軽減できる。

また、医師は必ずしも薬理・薬物動態・製剤特性の詳細を考慮して処方しているわけではない。薬剤師が普段から患者のバイタルサインを把握していれば、その変化に気づくことが副作用の早期発見につながり得る。

こうした点を考え合わせ、バイタルサインの把握が患者のためにもなり、かつ、薬剤師の地位向上にも役立つと考えた。

### ◆自ら可能性を縛っていないか? —薬剤師がしているいいこと、いけないこと

バイタルサインを把握する習慣は、薬剤師によるファーマコビジランス(医薬品の安全性監視)の意識づけにも役立つ。

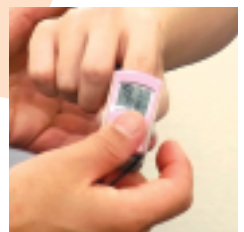
「在宅でも店頭でも、患者さんに渡している薬が本当に効いているか、あるいは副作用が出て困っていないか、患者さんの状態を把握せずに投薬しつづけていることの方が、むしろ怖いこと」だという狭間氏の指摘はもっともだ。副作用が出ているにも拘らず、患者本人は「いつものことだから…」などと自己判断して言わないケースもある。たとえば、呼吸器疾患があり、スピリーバ®やホクナリン®等を服用している

場合は胸の音を聴く、マグミット®を服用していればお腹の音を聴く、といったバイタルサインの確認が、実施中の薬物治療の評価につながる。

薬剤師が患者に触れるのはタブーのような風潮が未だあるが、狭間氏は「バイタルサインチェックの目的は、自分が患者に渡した薬の効果を、薬学的に評価することにある。ファーマシューティカルケアを実践するために患者に触れるのであれば問題ない」、弁護士の見解でも「体温測定・血圧測定・パルスオキシメーターによるSpO<sub>2</sub>測定や坐剤の挿入などは薬剤師が行ってよい」ことだと説明。参加者にとっては心強い後押しとなった。

参加者からは「薬剤師として患者さんに関われる方法はこれだけ、と自分で決めつけていたが、本日の講習でもっともつとやれること・やるべきことがあるのではないかと感じた。このことを自分の薬局に持ち帰り、さらに本気の薬局・薬剤師をめざしていきたい」という感想もあった。

血圧を測定したところで、「高血圧ですね」などと診断を下してはいけませんが、「昨日と変わっていませんね」あるいは「昨日より20mmHgくらい高くなっていますね」という“情景描写”にとどめておけばよいとのこと。測定だけしておいて何も言わないと患者は却って不安になるため、こうした表現でコミュニケーションを図ることが大切だ。



パルスオキシメーターによるSpO<sub>2</sub>測定

### ◆講習の実際は?

#### —一人に教えることでさらにステップアップ

実技では、狭間氏と、豊富な経験をもつ看護師の河島生美氏の指導のもと、参加者たちが2人ペアとなってバイタルサイン(血圧、脈拍、呼吸、SpO<sub>2</sub>)の採集方法を学んだ。

## バイタルサイン講習会の構成(全5時間)

オリエンテーション・自己紹介	15分
『薬剤師とバイタルサイン』 『バイタルサイン各論』 講師: 狭間研至	105分
コーヒーブレイク	15分
実技指導・ロールプレイ 指導担当: 狭間研至, 河島生美, インストラクター	120分
理解度テスト(実技+筆記テスト)	15分
『バイタルサインの本当の意義』 講師: 狭間研至	15分
修了証授与～終了	15分



参加者はお互いパートナー相手に何度も練習。狭間氏、河島氏のほか、午前中に行われたインストラクター講習を受けたばかりの人たちも、早速丁寧に指導していた。

心音・呼吸音の良し悪しの判断は初心者には難しいが、まずは左右を比べて違いがないかを確認するところから始めるとよいそうだ。さらに、聴診しながら発疹や掻き傷がないか見る、脈を採るとき手に触れて指先の温度や乾燥具合を確認するなど、バイタルサインの実測と併行してできるフィジカルアセスメントも多い。

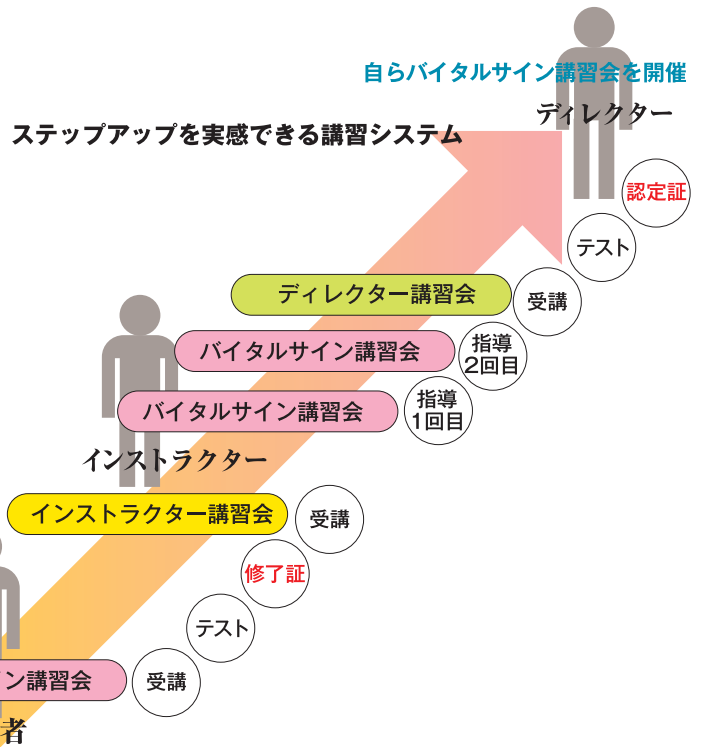
バイタルサインは、単に採集できればいいというわけではない。患者が不安を感じないような細かい気配りが必要で、自信なさそうにチェックするのはもってのほか。実技指導では、そうしたコツを丁寧に指導していた。たとえばアネロイド血圧計で測定する際は、カフの巻き方の手際よさ、空気の入力方・抜き方の速度の差、測定後にすぐに声かけをするか否かで、随分と印象が変わる。初めての参加者も、パートナーと何度も練習することで、見違えるほどテキパキと格好良く見えるようになっていた。

このような実技は、自分で実際にやってみることで、さらに他人に教えることで身につくものだ。そこで、バイタルサイン講習修了後、希望者は必要な講習を受講したうえでインストラクターとして指導する立場を経験し、さらにはディレクターへとステップアップできる。晴れてディレクターに認定されると、自らが講師としてバイタルサイン講習会を開催できる。薬剤師個人の資質向上と、バイタルサインチェックの裾野の拡大の両方が期待できるシステムといえる。

### ◆今後どう生かすか?

#### —自ら積極的にアクションを

病院にいれば、1日に何度もバイタルサインチェックを行うのが当たり前。数時間でも変動するため、頻繁に測定する



に越したことはない。看護師もそれをよく理解しているため、薬剤師が在宅訪問時に測定することに対し協力的だという。入院患者のように看護師が頻繁に測定できない患者に接する機会の多い薬局薬剤師こそ、バイタルサインチェックの手技を学ぶ価値がありそうだ。

狭間氏が社長を務める薬局では、薬剤師が午前中往診に同行し、気付いた事があればその場で医師に提言し、同日午後に薬を持参した際にバイタルサインチェックを行っている。1日2回訪問したからといって直接報酬(保険点数)には結びつかないが、医療連携、ひいては患者さんのためにベストだと考える方法をとっている。

既に、一部の薬学部ではバイタルサインに関する実習が行われている。バイタルサインチェックが薬剤師の業務の一環として当然のように行われる日がくるかもしれないが、「報酬がなければやらない」のでは腑甲斐ない。薬剤師は、他職種に比べ、制度や規則が決められるまでなかなか動かない傾向にあると言われるが、少なくともここに参加している薬剤師からは、現状に対する危機感と、いま自分ができる最大限のことを行動に移そうとする熱意を感じた。

今後の講習の開催概要は下記のサイトをご覧ください。  
<http://jahrap.org/>

#### iPad/iPhone対応アプリケーション

##### 『タッチ de 聴診』

胸の音を聴いても、「この音が正常なのかどうか?」は、経験を積まないと判断が難しい。異常がなくても、人によって音は違って聞こえる。薬剤師がいきなり何人もの音を聴くのは難しい。そこで狭間氏が開発したのがiPad/iPhone版のソフト。習うより慣れる!の精神で、何度も聴いて学習するためのツールだ。7月からは、講習でも、1人にiPad 1台を使用した講習を行っている。

